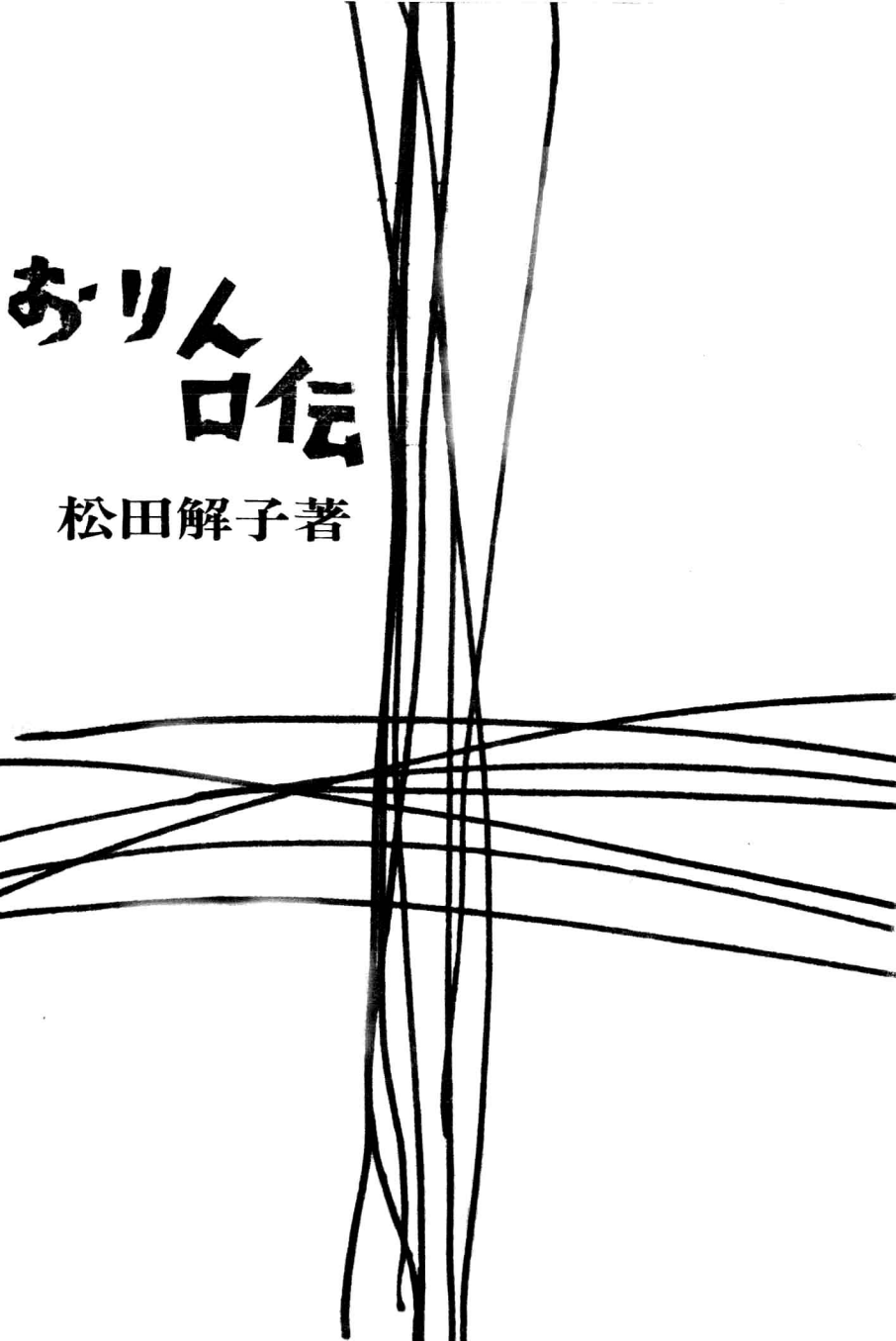


お・リ・ん ロ・伝

松田解子著



まつ 田 とき こ
松 田 解 子

1905年，秋田県荒川鉾山に生まれる。
日本民主主義文学同盟員，アジア・アフリカ作家会議
日本協議会会員。
主なる作品
「女性苦」「女性線」「町のなかで」「地底の人々」など。

おりん口伝

1966 年 5 月 25 日 初 版 ©

1966 年 7 月 10 日 第 3 版

定価 420 円

著 者 松 田 解 子

発 行 者 松 宮 龍 起

東京都千代田区富士見町 2 の 7

発 行 所 株式会社 新 日 本 出 版 社

電話 東京 (262) 4 7 3 2 番

振替番号 東京 1 3 6 8 1 番

落丁・乱丁がありましたらお取替えいたします (鎌倉印刷株式会社)

お
り
ん
口
伝

一章

一

「和田の家のおりんさも、とうとう鉢山さ嫁ったとな」

「ンだんだ、いった。境のかえりのから馬車でな。仲人の多吉おやじが手綱とって、多吉のかかゝがつきそつてよ」

「ふーむ、じゃ、和田の家からは、とうとう甥も甥嫁も送っていかなかっただ。ンでもからトロでよかっただ。石灰石の上さでものせられたら石の角コでつつかれて、嫁の着物もかかゝのも、行きつくまえに穴コだらけ

になったべよ、はは……」

とついだ娘は上淀川の元地主、和田恵之助の末っ娘で、とついださきは銅掘る鉢山。

そんなことからりんの嫁入りは、とうぶん村で沙汰されたが、なかでもその日は部落の北端れの小店のまえがにぎわった。そこへうわさの鉢山からトロッコレルがのびてきて急なカーブを切り、ひくい山ぞいに隣部落の羽後境へむかっていた。カーブを切ったレールをへだてて向こうがわが神明さまの杉木立。餡餅やセンバイをおいたこちらがわの小店には腰掛台が出されていた。田圃がえりの母たちがそこまでくると、せなかの草束をどんとおろして息を継いだ。

「……それで、おりんさ、なに着ていったや」

「たいした嫁衣装でいったてば。どうせ鉢山の聲の家からでも届けておいたのだから。ちゃあんと島田あげて角かくして嫁帯背負ってな。……ンだとも嫁の荷物ときたら柳行李が一つッコよ、はは……」

茶店の女房が急に噴きだすと、

「柳行李が一つッコ？」

「一つっこだと？」

そう問いかえして腰掛台の母たちも大口あけて笑いかけた。似たりよったりお歯ぐろの剝げた欠け歯がのぞいていた。茶店の女房がつけくわえた。

「ンだどもおらは、おめででえことには、ちがいねえだで声かけただ。——おりんさ、いよいよ嫁くのすか。馬トロくるまでここさ腰かけて待たねえすか。なんし、多吉っあんのお嬢さん^がもいっしょによつて、何度もな。ンだども、どっちも、ぜつてい寄りつくもんでねえだ。その神明さまの森背^し負^ふつてな。ただもう、おりんさなど、大事の嫁衣装^{よめぎ}の裾^{すそ}つかんで、下向きっぱなしで立てるだ。かかゝのほうは、まっくろい首^{くび}じんと立てていたどもな」

「ふーん、そしたら境の方角から、上等の多吉がつか出したと、……」

「それがちよつこらと出さねえだ。くるトロくるトロ、石灰石だのコークスだの、外米俵だのばかり、飽きるほどつみあげて、十台の余^よもきたどもな。するうち、かかゝがしびれ切らして嫁の行李^{けり}さ、けっかけてよ。そ

うしてしばらくしていたら、やつと多吉の馬トロがな、その森までつら出しただ。——きょうは、とくべつな荷^にっこが神明さまの森で待ってるで、なんとか馬トロ空^く車でかえしてたもれとて、境の出張所の旦那^{だんな}さんさ手すり足^{あし}すりしてるうちに暇^{ひま}とっただか、なんだだか」

茶店の女房は舌をおしまず弁じたてた。

うわさの鉢山はそこから東へ三里の奥。維新まえまでは藩直營。維新ご明治政府の手にうつり、のち、日清戦争がおわるまでは岩手出身の鉢山師・瀬川という者がもっていたが、戦勝翌年には三菱合資に買いとられ、いご直^{ちか}り、だした鉢山^{やま}であつた。当時たちまちはじまった道路改修工事や物資運びの労役に水呑百姓が先をあらそつて流れこみ、上淀川だけをとつてみても耕地の七割近くがその時期に他^た売^{ばい}された。

そしていまでは村役場さえ、三里山奥のその鉢山へ持つて行かれ、いっぽうその鉢山からのびてきたトロッコレールの終点の境には、宿舎や倉庫つきの鉢山出張所が設けられて、そこには家族持の出張員が常駐した。この出張員は軍隊上がりだということで、若いながらも鼻の

下にヒゲなどたくわえた、がっしりした体つきの男だった。村びとはかれの肩書きも名もよばず、『境の出張所の旦那さん』とよんだ。

鉾山からは連日午前、茜肌あかむねに霜しもでもふりかけたような色をした型銅を、かつちり並べ重ねた馬トロの列が、ハんで押したようにくりだしてきてここを曲り、またも半里さきの境出張所へ迂回した。するとその『旦那さん』が詰衿服に靴穿きで待っていて、手もとの人夫と馬車引きたちを采配し、その日の荷交換をさせるならいだった。

もともと境・淀川は陸路で羽州街道へ、また淀川くだりの川船で御物川おものがわへ、土崎港へ通じる要路だった。

石灰石やコークスはともかくも外米俵までが何台も鉾山へはいったのは月末が近づいたからであった。鉾山は毎月十五日と月末が勘定日で、翌日はズリ山（魔石のやま）の下に市いちが立った。その日は上淀川の農民も漬物や豆、小豆、季節の野菜や仏花ほとけばなまで背負おしょっていつて小銭にかえてくるのである。けれどもそれをいまここで口にする者はいなかった。

「ンでもなァ」

何人めかの母親がつぶやいた。「よくまず、あれだけの地主おやかたの末娘に生まれおりんさよ。ところもあるうに鉾山の馬肉貝焼うまにくかいやきなど、嫁く気になったもんだてば」

すると茶店の女房も首を大きくたてにふった。

「ンだてばよ。なんぼ相手が請負師だのなんだのといッたて、鉾山衆であるかぎりには馬肉貝焼うまにくかいやきにちげえねえべによ。どんたら地主も落ちぶれ果てればおら以下よ」言葉の切れ目にきた静寂を、鳥の声が、つきやぶった。神明さまの森が枯れた杉の葉をふりおとした。

「さッて大事の馬ンコが腹コすかして待ってるべな」

「嬰兒詰えいめいひつぎで蛙ひづめ（赤子）が泣いていら」

女房たちが口々にいいながら腰をあげた。背負おしょった草束に鎌の刃をひからせ、体をくからだの字に曲げてかえりだし

二

りんは馬トロにゆられていた。
不安だった。

まだ見ぬ鉾山と、まだ見ぬ相手が気になった。それより以上に相手の家が、はたして仲人の言葉どおりの家なのか、また直きじきに一度は上淀川のが家をたずねてきた相手の母の口上したとおりの家なのか？

レールの継ぎ目が多い上に、その高低がひどいらしく馬トロはやたら上下へゆれ、でなければ左右へゆれかえった。

相手の家からとどけられた嫁衣装と嫁帯が、りんにはきゅうくつでならなかった。ときおりちかづく農家からのぞく目を、りんは柄長えながのコウモリでさけた。

さすがにじぶんの夫が手綱てなづなとるトロの上で、多吉の女房は終始にんまりと笑みをうかべ、心地よさそうにゆられていた。

女房とりんのコウモリがトロのゆれにつれてもつれ合った。

馬トロはやがて杉の木立や灌木林をとりぬけ、下荒川や上荒川などの名のついた部落を左右ま二つにかきわけて、いつしか山路へはいっていた。

「おりんさよ」と、そこで女房が話しかけた。「も

う、は、上荒川もすぎたから、膝ひざっこのぼして楽にしゃんせ。これからは三軒屋、面日おもひまで、ずうっと山だな。まず、おら、ごめんこうむって足出さえ」

うすべり一枚の半分へ、女房はゆうゆう両脚をのぼしかけた。りんも横坐りになりながら、「それじゃ、お母さん、ごめして下くだい」とことわった。

雲ひとつない秋空に白金色の陽がくるめき、まわりに草いきれがこめていた。馬トロは枕木のよこのダンブリ花やひる顔や赤マンマに、車軸あぶらの黒いしずくをたらしながらとおりすぎた。

女房はつづけた。

「おらこそこのとおり、ごめんこうむったす。鉾山じやおらだの、めったに膝など折らねえから、ちよっと折ってもびりびりって、まるで電氣に感電かんでんられたみたいになるもんでな。ンでも、きようは、ええ天氣で助かったす。客トロなら、ちゃんと屋根っコかかってるで、雨ふっても槍やりふっても、なんでもないんだども、馬トロはこのとおり台あるだけで屋根ないでな。ンでも三里も歩くより、なんぼ楽だか知れねえすよ」

「ほんとにおかげさんで」と、りんはいった。

おなじ鉢山へゆくにしる社員が社員の家族なら屋根つき客トロへのれるけれど、社員以外の者がのることは三菱の法度^{はつと}だった。もともと鉢山事務所へくる大事の客は別だったが。馬トロにしてもそれがからトロであれ荷きょうは、多吉がむりやり鉢山事務所へかけあい、境の出張所の旦那さんにもかけあって、特別のせてもらったのだと、女房は小鼻をふくらませていった。

「それというのも、なんし、おりんさ。あなたの嫁^{よめ}く家が鉢山で名の売れた東畑さんだからこそだんすよ。おら夫^{おとこ}なんぼ口あんばいよくたって、相手が東畑さんの家でなくて、ただの鉢夫であつたとしてみっせ。ぜったい馬トロからにして嫁コもへちまものせてなぐれねえから。のせてくれねえだけじゃなく、それ見つかったら、あとで巡視^{じゆんし}にこつびどくご性焼かれて、三拝九拝しても足りねえだから」

ご性焼かれて、——つまり、怒^{いか}られて、と、きくや否や、多吉が馬の手綱をにぎったまま、大声あげてどなり

つけた。

「なに阿呆^{おろこ}話^わするだ、そこで。おらかかゝは？ だれが巡視^{じゆんし}になど、ご性焼かれるって？」

けれども女房は落ちついたものだった。

「夫^{おとこ}またなんで、急にあらとこ、ご性焼くだよ。おまえのことでねえだよ、この話は。——ほうら、いつだかサキ山の桜井がよ、荷物のふりして薙^はかぶって、おまえのトロでよ、うふふ……」

女房はそういつて噴きだし笑いでごまかした。ついでにりんの耳へ口をよせて、

「あのとおりだ、気性が荒くて、おら夫^{おとこ}は。——ンだからまず、鉢山でも重くみられて、つとまってる。……」

女房はまもなくたるんだ臉をあわせて眠りこけた。

うしろへのせた柳行李に女房の太鼓帯ががさごそ擦れ、トロははげしくゆれつづけた。黒コウモリがおどりはねた。レールが急カーブへさしかかった。

りんは頭上をふりあおいだ。あくまで晴れた秋空が、急に前方でせばまって、トロの右手にいまにも欠け落ち

てきそうな裸の岩山が張りだした。トロの左手をのぞきこむと、レールから二尺やつの幅をのこしてぞっとするほど切りたつた断崖がすべり落ち、その遙か下を青ぐろい川水が淀川方向へ走っていた。——あの青ぐろい川水は鉾毒のせいなのだ。——と、りんは心づいた。対岸も似たりよつたりの断崖で、そのむこうは、炎暑に焼けちぢれたような雑木におおわれた山だった。それが波打つように奥へうねっていた。

「おお怕わ」

りんは思わず声をあげた。

多吉がしつかり馬の口を取って、向こうむきのまま話しかけた。

「ここが陰所のキントリ山でな、おりんさ。ここ通つてしまえばすぐ三軒屋で、三軒屋すぎれば、あとはもう、まばたきするまに鉾山だで、なんもおっかながることねえだ」

「はア、キントリ山、……」と、りんはつぶやいた。むかし、金でも取つた場所だろうか？ りんは肝でも取られそうな恐怖にとらわれた。右手頭上に張りだして

くる岩山が、どこまでいっても鉾山だらけ。トロの震動につれてころころと、欠けた岩ころがころげ落ちた。亀裂にそうてにじみ出た岩清水が陽にきらめき、銀いろの蛇でも這うように赤い岩肌を這っていた。——いつかあの、いちばん大きく張りだした岩のこぶも、どかんとトロのま上に落ち、馬トロも馬も馬方もいっしゅんのまに圧しつぶして、この左手の断崖から川底へもんどり打つのではないだろうか。——

せなかに冷や汗をかきながらりんは想像した。

すると無性に、あとにしてきた上淀川恋しさがこみあげた。

とは言つても、そこにはすでに両親もきょうだいもいなかったが。

それでも子供の時分から一つ家で、きょうだい同様に育つた甥の庄蔵が、

「ンでは、おりんさ、しあわせに暮して下い。——谷地田氣がかりでおらもおゆきもきょうは送つてもゆかねえですまないども、……」

肩にかついできた柳行李を、あの神明さまの森でおろ

してそういったとき、りんは涙が落ちてきてならなかった。

年こそりんの二つ上だったが、庄蔵はりんの長姉の子であつた。嫁のゆきとの間には、すでに二人の子もあつた。

「どうもありがと。おらもしあわせに暮すつもりだから、おまえさんがたもしあわせにな。童子^{わかしこ}コがたも大事にな」

やつとそれだけをりんはいった。

野良着のままの庄蔵は、仲人の多吉の女房にも、あらためて挨拶した。

「ンでは、お母さん、なんとか叔母とこ、よろしくたのむんす」

「あい、あい、わかつたす。わかつたす。おらたち夫婦がついてる以上は、おりんさを、ふしあわせにするよなことはねえだから安心して下^{くだ}いてばな」

「ンでは、は、ここで、ぶ調法^{ちやうほう}するす」

「あい、あい、そうしやんせ、そうしやんせ。なんと、は、きょうは、えっぱいご馳走^{ちしう}になつたんす。おゆ

きさんさもよろしくいって下い。なッに、一ッ時^{ひととき}ここで待つてれば、おら夫^{おつこ}かならず馬^{うま}トロからにして境^{さかい}からくるだでな。なんも心配^{しんぱい}しないで大急^{たいきゅう}ぎ田^いさいって下い。

……」

「ンでは、は」

「ンでは、は」

庄蔵が深^{ふか}お辞儀^{じぎ}をしてかえりかけた。

北はあの、神明さまの杉木立から、南はかつて村倉が建つていた上淀川橋のたもとまで、古来の村道の両がわに申しあわせたように小さな紅殻塗りのくぐり戸と、似たようなカヤぶき屋根の家をつらねた上淀川。一軒毎の軒下に咲き敷いたボタン草の花や、わが家の垣にふるえていたモンキの花。つづく空地にのびあがった火の見やぐら。――庄蔵の、いくらか猫背の野良着姿はみるみるうちに小さくなり、やがて点になってその火の見やぐらの手前へ吸われたが。――昨日の昼までその甥夫婦といっしょにかよった谷地^{やち}田^だの稲の立ち枯れた姿がりんの目さきにちらつた。また訪れる夏ごとにかばかばと乾いた蹄^{ひづめ}の音をさせてあの村道を川べりへ裸馬をかけらせて

通りすぎた若者のけはい。そのつどゆえもなく動悸打ったじぶんの胸の波立ちも、いまのことにようによりみがあった。そんな若者が何人か日清戦争で召集になり、二人までが白い骨箱にはいつてかえってきた。どちらもりんには忘れられない若者であった。

当時のりんは、そして多吉が鉾山から、こんどの縁談をもってわが家をたずねたその日まで、じぶんが鉾山へ嫁入るなど、思いもよらぬことであった。村びとがいう『鉾山の馬肉貝焼』。その一言をきいただけで、りんは怖じけをふるっていた。

「鉾山じゃな、食うにも事欠いて、のめり死にした役馬の肉まで貝焼鍋にしてつくつくとよ」

「鉾山じゃな、鉾夫が逃亡したとてな、きょうも板張、鍋倉から、上荒川まで追手出たと。いまにつかまればその鉾夫も、まるっぱだかさコールタ塗られて、せなかさ忌中の紙貼られて、鉾山じゅうをねり歩かせられるのだべよな。ちらましないな」

「ちらましない（むごたらしい）ども、しかたねえだ。それが鉾山の規則じゃな。むかしから鉾夫などに

る者は藩主さ盾ついた謀叛人か強盗殺人した囚人と相場がきまっていたもんだで」

出入りの村びとがいう話をりんもこども時分からきいていた。生前りんの父なども娘に言いきかせていたのだった。

「百姓も、早、冷害、饑饉では、昔から泣かされてきたものだども、鉾山衆よりは、まだええだ。煙鉾山みる、煙鉾山。煙は昔からの金山で、藩の金山方が直轄したころは、南座千軒、北座千軒とて、たいした栄えたものだども、享保十三年の大水で大落盤して鉾夫が千人も死んだと言わ。怪我は何百人あっただか。死んだ鉾夫の千人の数がわかったのは、坑内さはいるとき坑口さ脱ぎすてていった上衣の数が、あとで見つかっただけでも千あったということだな。維新の戦争でこの村も九割九分まで焼けたため、文書はのこっていないども、代々の古老の口伝じゃな。……煙金山はその落盤で廃山になったきり、いまじゃ見る影もない部落になってしまっただ」

父親の話では上淀川から北へ一里の煙金山も、東へ三里の荒川という銅山も、みんなむかしは藩直轄で、掘ら

れ、焼かれた金銀銅は淀川下りの川船で藩へ運上されたものだった。ここの産の米や材木にしろそうだったが、その宿場駅に境・淀川は活用され、「おら和田の家も宿場やっただ」とのことだった。

けれどもりんには鉾山にまつわるどんな話より、村びとのいう馬肉貝焼の一言がこたえていた。逃亡、落盤で古来鉾夫がうけた痛苦よりも、村では財宝の馬の死肉を帆立貝の殻で煮て食うという鉾夫への、村びとのさげすみがこたえていた。

それゆえ多吉が、とつぜんわが家へあらわれて切りだしたセリフも忘れかねた。

「そういうわけでよ、な、お前さんがた」

多吉はそのとき陽に焦けた咽喉玉をふくらませ、上り樞に腰をおいたまま切りだしたのだった。「おらもいまではこのとおり鉾山の馬肉貝焼になってしまつて、年じゅう馬のけつ叩いて境さ型銅運ぶ身だともよ、もともとはこの村の百姓でよ。それも、誰の田でも無え、この和田の家の田さ、へえったものよ。そういつても、そのころのお前さんがたは、まだ小っちゃくて、多吉のタの字

も知らねえべがな、……うん、知らねえべよ、知らねえべよ」

そうして多吉は当時の和田家の贅沢さんまいの地主ぶりや、その家の末っ娘のりんをはじめ、二つ年上の甥の庄蔵が、どんなに貧しい村びとに羨まれながら、村始まつて以来の小学校に通つたか、またどんなにりんなどはあのお父さんの可愛子で痛痒知らずに育つたかを物語つて、「なんせその時分のお前さんがたにとっちゃ重い物は箸ばかりであつたからな」と、つけくわえた。

「ところだよ」と、さらに多吉はたたみかけた。「そのあとあれだけの大地主の和田の家は、どうなつたす？ お前さんがたが十五、六にもなつたときは？ 旱りはある。ンだかと思えば大水ヲ出る。その翌年は、また大火でよ。この村道の両がわが、てろつとあの火に紙められて、村倉の米まで灰になつたんすべ？ 和田のお父さんが村長したとき人先になつて建てたあの村倉よ。そのためおらたち貧乏小作さ救護米一と粒出ねえうえに、境の地主衆までが、ある米かくして値え吊つて饑饉同然のくるしみだ、おらは荒川鉾山さ、人先になつて落ちた組

よ。……

ンだどもこの家だって、あのあとは掘立小屋さ、へえったすべ？　なんと、この家のお父さん兄さんたら、妾と芸者で名が売れて、あれほど持っていた田も山も、あらかた煎りあげていたからな。ンでもあのあと兄さんは勘当になって秋田市さゆく。お父さんお母さんは病みついてばたばた死ぬ。そこで庄蔵さんが、畑からおゆきさもらってきて家継いで、爪さ火とぼして稼いだで、ここさこうしてまた、カヤ葺いた家ッコも建ったのだから。ンだども、こんなら小っちゃい家ッコに末っ娘のおりんさが、いまだにその年で独り身でいるんすべや？　……おら、それ思えば、気の毒で気の毒で、なんともならねかったすよ。ところがよ」と、多吉は本論をくりひろげた。

「世間はけっこう面白いもんで、なんぼ落ちぶれたってええだから、そういうたしかな家柄の娘ほしいという家が鉾山にはあるもんで、おらもこうして、きょうはわざわざ型銅運び欠け番してまできたのだから。しかもその家はおなじ鉾山でも、ただの馬肉貝焼じゃねえだか

ら。……主人は東畑吾作とて、鉾山切つての請負師で、そのまたつれあいのお母さんは立て膝の上き巻紙ひろげてどんたら長い手紙でも書けるひとだ。弁などだって立って立って、とても男など叶うもんでねえ。家だつてりっぱな二階家で上下の間数は十もあら。場所は鉾山でもえつとう長い大直利橋の橋たもとでな。それやこれやで鉾山長でも主任でも一目おいてるだ」とほめそやした。

「ところがよ」と、多吉は結論にはいっていった。

「それよりええのが肝心の婿になるひとの人品ですよ。このひともやっぱり請負やってな。ンだどもこのひとは、ぜってい他人さ、えばらねえひとだんだ。それでいて金払いはええし、男ぶりはええし、なにより人品が上等で、そなわるもので、そなわらねえものはひとつとしてねえひとだ。ンだから土方でも鉾夫でも、千治郎さん千治郎さんとて、なついているだ。年はおりんさより一つ二つも上だだか。……とにかく、そういうひとがおりんさ欲しがっているだでな。まずこの多吉に、だまされたと思って嫁てみっせ。相手がええだけに、嫁たら一生、はなれられなくなるだから」ここで多吉はてかて

かに禿げた頭の汗を首にたらしした手拭をとって、ぐいとぬぐい「なんとだす？」と、りんの返事をせまったのである。

けれどもりんはただ当惑した。怖じけもあったが当惑で目の据えどころにも窮していた。が、反対に甥夫婦が、とりわけゆきが、この縁談に意気こんだ。

あくまで返事をしふるりんへ、とうとうゆきは切りだした。

「なんとかおりんさ、決心して嫁って下いや。その家なら、ほんと多吉親爺のいうとおり、りっぱな家だから。おらもその家なら鉱山さ漬物売りにいつて見てるだから。市さ買物にくるたって、なんぼ儲かるもんだだから、そこのお母さんなど、札ビラ切って買うひとだから、……」

りんが返事につまんでいると、ゆきはずばりと、いつてのけた。

「なんせこの家の田っコだけじゃ、手もあまれば口もあまって釣りがくるさまになつてゐるだから、な、おりんさ！」

胸に刃物でもかざされたようにりんはぎくりとした。

落ちぶれば？ 親が死ねば？ 血を分けたきょうだいがいなくなれば？——ふろしき包み一つ下げて嫁た甥嫁にまで、こんなあしらいをうけねばならないのか？

その日の夜もつぎの夜も、りんは独り寝の枕をぐつしより涙でぬらして寝た。わが家の今昔が身に沁みた。祖父惣右衛門の代までは堅気で知られた宿場で戸長。そのあとつぎ娘（りんの母）の入贅であった恵之助が維新後初代の村長であつたが、末子のりんが十、十一にもなつたときはその父が名打ての女道楽と芸道楽。琵琶師、祭文かたり、娘義太夫と、わが家を場所に法楽でかたらせでは村びとから、お父さんお父さんともちあげられて悦に入り、あげくに芸人が女とあれば、あらぬかかりあいについて母を泣かせ、おまけに長兄の与之助が秋田の芸者買いで身代をもちくずした。維新の戦火以来といわれた猛火が村を焼いたのは、そのごの明治二十七年春。日清戦争へあと三月というときで、その春十六のりんは甥の庄蔵と生まれてはじめて田にはいった。脛に吸いつく蛭にも怖じなくなつたころは甥が嫁を迎え、りんの両親

はばたばたと、——多吉の言葉にあったとおり、——死んでいった。「おら、他人よろこばせるたって、他人泣かせなかった。……」父は言い遺した。父とすれば、妻こそ泣かせても他人からの借金申込や、踏み倒し、年貢、証文のたぐいのいざこざでは、他人を泣かせなかったとも言いたかったのだらうか。母は言いのこしさえせずホトケのような顔のまま息絶えた。夫妻があゝの世へ逝ってからのこの家には、親戚さえもいつしか寄りつかなくなっていた。

「見れみれ、恵之助の娘が草刈ってる」

「見れみれ、恵之助の娘が肥桶こいたかつぐ腰つきよ」

それから六年、りんは村びとに後指さされながら甥夫婦と田圃はたけばたらきをしたのである。「重い物は箸はしばかり」の生い育ちと、そのときりんは訣別したのである。が、村では和田の家の父子二代にわたる没落の経過を承知なので、その末娘のりんを嫁にとくるものもなく年月をすごしてきたのである。りんはともあれ甥夫婦が、その縁談にとびついたにしろ無理なかった。しかもそれから十日とたたず、こんどは相手の母だと名のるひとがた

ずねてきた。

「仲人の話だけでは心配で、わだしが直じかにきやんした。荒川鉾山は東畑吾作の女房で、千治郎の母のヨネであんす」

下にもおかぬ甥嫁へ、そのひとは土産物の反物の包みを出し、満面痘瘡の穴でふさがれた老いの顔をほころばせて口上こうじやうした。それがとっておきの秋田弁あきたべんだった。

「ところであの、——仲人のほうからしてもらった話はどういうことになっていやんしょう？」

返事につまった相手かたをやんわり見て、「それじゃまず」と、老いの姿勢を正すようにしてのべたてた。

「さっそくごめんをこうむって、こっちの本心いわせてもらいあんすども、じつはわだしのほうとしては、しんからこの家の血統に惚ほれてきやしたてば。……あの仲人のいうところじゃこの家も、まともにゆけばいまごろは、ここさ白壁の倉でんとたてて、若勢わかぜきの十人、二十人はおいていやしたであんしょうに、あんまりこの家のお父さんが出来すぎて婆おば婆ばつけなくしていたばかりに、地租も登記も他人ひとまかせ。借せという者にゃハイハイ貸かし